

多くの偉大な師から教えを受けた 学術的な視点を持つ血液内科医

隣人愛と全人医療を掲げ地域包括ケアに努める

体の病気を治すだけでなく、悩みを聞き
心と魂までケアして行く
人として当たり前前のが、全人医療です



一般財団法人日本バプテスト連盟医療団 **日本バプテスト病院**

理事長・院長 **尼川 龍一**

明日の医療を支える信頼のドクター

『揺り籠から墓場まで』

これを病院として体現し、胎生期から終末期まで診療が出来る体制を有しているのが、銀閣寺に程近い風光明媚な土地柄に位置する日本バプテスト病院だ。

1955年、日本バプテスト病院は、米国南部バプテスト諸教会の献金により作られた日本バプテスト連盟により設立された。初代院長は駐在陸軍の米国人軍医で、当時は職員全員がクリスチャン。現在も敷地内に牧師室とチャペルを備え、イエスキリストの隣人愛に基づく基本理念『全人医療』を掲げている。

現理事長は血液内科の権威、尼川龍一医師。臨床・研究共に数多の研鑽を積み医療の発展に寄与しているながら、その経歴と実績をひけらかさない謙虚な尼川理事長にお話を伺った。

最後の砦 『断らない病院』

消化器センター、周産期医療、ホスピスを柱に地域医療を支える

日本バプテスト病院は『断らない病院』を謳う。コロナ患者の診療拒否があった時期も多くの患者を受け入れ、京都府・京都市から「コロナ診療の最後の砦」と言われるほどに評価が高い。多く有する診療科目の中で柱となっているのは消化器センター、周産期医療、ホスピス。そして、尼川理事長の専門である血液内科が準じる。

創立以来、周産期医療に力を入れ、地域周産期母子医療センターに認定されている同院は、『京都で生まれた全ての赤ちゃんが等しく十分な医療を受けられるように』をモットーに医療を提供。重症児の治療では訪問診療も行うなど意欲的に取り組んでいる。



京都府下で最初に認可され、年間約150例の新生児管理を行っている同院のNICU

以前、京都府は新生児の死亡率が高く、周産期医療の成績が悪かった。そのため同院は、NICU（新生児集中治療管理室）を保有する病院から医師を招聘。1995年には京都府で初めてNICUの認可を受け9床を設えた。加えて、京都市内に数台しかないNICU用の救急車も所持。地域貢献のため、NICU用救急車と医師を貸し出し、他院から他院へと新生児を搬送する三角搬送を行う。大阪、滋賀、兵庫まで搬送する例もあるなどその貢献は大きい。現在は少子化が進み、京都府全体のNICUを用いる症例は減少傾向。経営面でも厳しい分野だが、高齢出産によるハイリスク分娩の数は増えており未だNICUの価値は高い。同院は京都に生まれる新しい命を想い維持を続けていく。

同じく1995年に終末期患者の痛みや症状を緩和する、ホスピスの認可も京都府下で最初に受けている。同院のホスピスで特徴的なのは、チーム医療としても欠かせない位置にいる牧師（チャプレン）の存在。患者だけでなく職員の間にも聞き人々の心を癒している。「クリスチャンに限らず、仏教徒や無宗教の方も心に抱えているものを牧師にお話しされています」
また、尼川理事長は「悪性リンパ腫を患い一般病棟に入院されたお婆さんがいました。ホスピスにはその方のご主人が先に入院されていたのです」と、ホスピスでの印象的なエピソードを語る。血液疾患患者が一般病棟からホスピス病棟へ移る例は少なかったが、「最期は夫婦でホスピスの同じ部屋に移り、ベッドを並べて1週間ほど2人で過ごしてもらえました。奥さんが先に逝かれましたが、その時も2人で手を繋いで。最期に大切な人と一緒に居ただけでよかった」という。最期まで患者の心に寄り添う、尼川理事長の姿勢が伺えた。

地域の要となった血液内科 その道を選ぶまで 先代理事長 北堅吉医師との出会い

尼川理事長と先代理事長である北堅吉医師の専門科目は、感染制御のノウハウや看護師の手法、充実した設備など、全てにおいて高いレベルが必要になる血液内科。同院は京都・乙訓二次医療圏における血液疾患入院患者の約6%が入院する地域の要の1つである。

白血病、悪性リンパ腫などの治療では免疫力が弱くなるため感染症になり易く、計6室の無菌室は常にフル稼働。無菌室は尼川理事長が赴任した際、北医師から号令を受け造設した。尼川理事長赴任による血液内科の充実を期待してのことだ。では、これほど強い期待を受けるに至るまで、尼川理事長はどのような人生を辿ってきたのだろうか。

体が弱かった尼川少年。体調を崩した際は父の車に揺られ、大阪市浪速区にある自宅から離れた隣の市の信頼できる医師のところまで通っていた。

「先生はテキパキと診察し体を楽にしてくれ、佇まいも格好良い。幼いながらその仕事ぶりに憧れました」
1982年京都大学医学部を卒業、附属病院の第一内科で研修医として勤務する。そこで出会ったのが大学院生の頃の先代理事長、北医師だ。当時の北医師は研究が忙しい中でも夜中の呼び出しに応え、患者に対応する臨床に熱心な青年。「特別可愛がってもらいました。お世話になった先生の中でも、特に親身になってくれたのが北先生。面倒見が良く、熱心に指導してくれました」

1980年前後の血液疾患領域は、大きな進歩の時代。血液細胞に発現する様々な分子をモノクローナル抗体で検出する技術の確立や、リンパ球に複数のタイプの存在することが明らかに加えて、白血病や悪性リンパ腫におけるがん遺伝子の変異や発現量も解析が可能となるなど、他



礼拝と朝礼が行われる病棟3階のチャペル
職員だけでなく患者も礼拝に参加している

たくさんの恩師の元で知識と技術を深める 研究や臨床、論文執筆に明け暮れた学びの日々

分野に先立ち幾つかのブレイクスルーがあった。
尼川理事長はその進歩の過程を目の当たりにした経験や、北医師の魅力から血液内科を志望する。

血液内科には様々な病態の患者が訪れる。総合的な能力が必要であるため、尼川理事長は静岡病院の循環器内科で研修を受けることにした。1983年当時、そこには異型狭心症が冠動脈攣縮により起こることを世界に先駆けて既に証明していた泰江弘文医師（後の熊本大学教授）が在籍。「小さな現象も見逃さず原因を究明するため、作業仮説を立てる方でした。泰江先生からは、臨床医や研究者にとって科学的好奇心が大切であることを学んだのです」
尼川理事長は在籍した3年間で200例に及ぶ心臓カテーテル検査を担当。1週間程CCUに泊まり込み心筋梗塞患者のケアをするなど多くの経験を積む。これらは血液内科でも対応する場合がある疾患。後の大きな糧となった。

1986年には京都大学の福原資郎医師（後の関西医科大学教授）の勧誘を受け、大学院生として悪性リンパ腫の研究に従事した。福原医師は米シカゴ大学で、慢性骨髄性白血病に特異的な染色体異常であるフィラデルフィア染色体すなわちt(9;22) 転座を発見したJanet Rowley教授に師事。濾胞性リンパ腫に特異的な染色体異常であるt(14;18) 転座を発見し、14q32 転座型腫瘍の概念を提唱したリンパ腫の染色体分析における大家である。福原医師の指導を受けて、尼川理事長は悪性リンパ腫について計3つの英文論文を発表するなど精力的に取り組んだ。

大学院時代の後半は、京大医化学第一講座に学内留学し、後年、免疫チェックポイント阻害薬「オプジーボ」でノーベル生理学・医学賞を受賞することになる本庶佑教授に師事。ヒトRBPJ遺伝子のゲノム構造を明らかにした。

「お世話になったのは、隣の研究グループが免疫チェックポイントに関わるPD-1分子のクローニングをしていた頃でした。それが10年の時を経て、オプジーボの開発に繋がった。その経緯を想うと感慨深いものがあります」

ここで学んだものに『本庶教授の6C』がある。6Cとは、好奇心(Curiosity)を大切に、勇気(Courage)を持って、困難な問題に挑戦し(Challenge)、必ずできるという確信(Confidence)を持ち、全精力を集中(Concentration)させ、諦めずに継続(Continuation)する。

「中でも印象的なものは、折に触れてスタッフに伝えています。チャレンジし、集中すること。」

そうして継続すれば、そのプロジェクトは花咲くことがあるよ、と
1992年には、カナダ・トロントのオンタリオ癌研究所に留学。T細胞受容体β鎖をクローニングした功績を持ち、当時ノックアウトマウスの作成で世界をリードしていたTak・W・Mak教授に師事する。
長年正体が謎であった分子、ホジキンリンパ腫に特異的に発現するCD30の機能を特定するため、CD30ノックアウトマウスを作成した。

ノックアウトマウスは特定の遺伝子を無効化した遺伝子組み換えマウス。削除された遺伝子の機能を推定するための重要な役割を持つ。この研究によって、CD30は胸腺におけるT細胞のネガティブセレクションを促進する分子であることが判明。尼川理事長が研究結果を記した論文は、ライフサイエンス分野で世界最高峰の学術雑



誌と誉れ高い『セル』に掲載されている。(Cell・1999684(4):551-62)

留学から戻る際には、本庶教授から基礎医学研究分野における選択可能な複数のポジションを提供されたが、尼川理事長は「臨床は外せない」と考え現場へ戻った。学術的な世界にいる研究者は、科学的思考力に富み臨床医としても活躍が期待できる。ガイドラインはあっても、複雑な病状であれば検査や治療の方法について綿密に検討する必要があるためだ。

「臨床や病院運営の場でも今まで教えられたことは無駄になっていません。問題があった時に『あの先生ならどう考えどう対処するか』を如実に思い浮かべることができますから」

1998年、関西医科大学第一内科へ赴任。血液疾患の診療に従事する傍ら、6名の大学院生の学位論文を指導。その過程で様々な炎症性疾患の発症における共通基盤「ヒト末梢血樹状細胞のリクルートモデル」を提唱した。また、ベーチェット病にアダカラム(血球細胞除去用浄化器)による白血球除去が有用であることを臨床の場で実証している。

そして2011年。北医師から「日本バプテスト病院へ来ないか」と連絡を受ける。

「北先生のが大好きで尊敬していましたが、二つ返事で承諾しました。そうして、30年ぶりに一緒に働かせていただくことになったのです」

2015年には副理事長兼院長に就任。北医師の逝去に伴って2019年には理事長に就任する。尼川理事長の医師人生の初めに出会った北医師。その最後に、時間を共にできたことには運命的なものを感じられた。

「日本バプテスト病院を4つの柱で、隣人愛、に溢れる病院へ 優しくして親身になってくれる、居心地の良い素敵な病院」

院長として初めて行った仕事は、看護管理部発行の会報『ともしび』の執筆。そこへ病院運営の4つの柱を記載した。1つ目に医療安全、2つ目に地域包括ケアを見据えたベッドコントロール、3つ目は接遇の向上だ。

当時、患者から厳しい叱責を受けるほど態度の悪いスタッフもいたという。そのため、キリスト教の病院だということにできていなかった隣人愛を、接遇で表そうという試みだ。これについて、外部の専門家に接遇を採点してもらい、フィードバックを受けるといふ改善策も行っている。

4つ目は職場環境の整備。設備投資に加え、職員同士のコミュニケーション不良を正すべく挨拶から指導した。職員同士が尊重しあう心を持たなければ、患者にも良い接遇はできないためだ。取り組みの甲斐あって病院評価は上がり、患者からも賞賛の声が増えた。医療関係者からも「優しくして親身になってくれる、居心地の良い素敵な病院」などの賛辞の声が届くようになっていく。

「からだと、こころと、たましい、全てをケアする」

医療・介護・福祉の総合力で地域包括ケア構築の道を開く

同医療団はバプテスト老人保健施設、バプテスト居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションもおも運営。地域と連携して地域完結型の医療介護に注力する。

2019年、尼川理事長は急性期病棟の1つを地域包括ケア病棟に転換。ケアミックス型へ移行した。入院を長引かせず60日間の徹底したりハビリを行い、在宅医療へ繋ぐことを目標とする。「超高齢、少子、人口減少社会にどう対応していくか。医療団の持つ医療・介護・福祉の総合力で地域包括ケアシステム構築の道を開くことに貢献したい」という同院の展望に繋がるものだ。

PROFILE

尼川 龍一 (あまかわ・りゅういち)

1957年、大阪府で生まれる。
 1982年、京都大学医学部 卒業。京都大学医学部附属病院で内科研修。
 1983年、静岡市立静岡病院。
 1986年、京都大学医学部附属病院第一内科(現 血液・腫瘍内科)。
 1991年、京都大学大学院 修了。
 1992年、京都大学医学部第一内科研究生 修了。カナダ Ontario Cancer Institute 留学。
 1996年、天理よろず相談所病院。
 1998年、関西医科大学第一内科助手・講師。
 2000年、関西医科大学第一内科助教授。
 2006年、関西医科大学附属滝井病院血液・呼吸器・膠原病内科部長、感染対策室長。
 2007年、関西医科大学第一内科准教授。
 関西医科大学附属滝井病院血液・呼吸器・膠原病内科病院教授。
 2011年4月、日本バプテスト病院副院長 着任。
 2015年9月、日本バプテスト病院病院長。
 2019年9月、日本バプテスト連盟医療団理事長(病院長兼任)。

【所属・活動】

日本血液学会功労会員、日本リンパ網内系学会評議員、
 日本血液疾患免疫療法学会功労会員。
 日本内科学会、日本免疫学会、日本癌学会。第115回近畿血液学地方会 学会長

INFORMATION

所在地	〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町47 TEL 075-781-5191 (代表) FAX 075-702-8412 (診療関係) 075-701-9996 (総務関係)	
アクセス	京阪電車「出町柳」駅下車、市バス3系統(北白川仕伏町行き)終点「北白川仕伏町」停留所より徒歩約2分 地下鉄烏丸線「今出川」駅よりタクシーで約15分 無料シャトルバスも運行	
設立	1955年	
診療科目	内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、神経内科、血液内科、糖尿病内科、小児科、外科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、人間ドック、腎臓内科、脳神経外科、皮膚科(入院診療のみ) 〈特殊外来〉 ホスピス外来、乳腺外来(マンモグラフィー検診認定施設)、小児科発達外来、小児科ワクチン(一部自費)、セカンドオピニオン外来(自費)、母乳外来(自費)、助産師外来(自費)、禁煙外来、渡航外来	
診療時間	〈月～金〉8:30～12:00 〈土〉8:30～11:00 〈休日〉日・祝・年末年始	
基本理念	日本バプテスト病院の基本理念は全人医療です。人間は「からだ、こころ、たましい」からなる全人格的な存在です。 当病院は、イエス・キリストの隣人愛に基づき、全職員がよいチームワークを保ち、専門的知識と技術を活かして、全人医療の業に専念します	

<https://www.jbh.or.jp/>



イエス・キリストの隣人愛と全人医療を掲げ、患者を支えている

「基本理念にあるように、人間は、からだ、こころ、たましいからなる存在。体の病気を治すだけでなく、悩みを聞き心と魂までケアして行く、人として当たり前のことが、全人医療です」
 尼川理事長は師事してきた偉大な医師や研究者の教えを生かし、体の病気は勿論、心の不安感を取り除くことも大切に、心理的な苦痛や魂の領域にまで寄り添い続けていく。

「誰でも病を得ると不安になり、辛く当たりたくないのも当然のこと」と理解を示す。

「治し支える医療を念頭に置いて治療に当たり、多職種チームワークによる介護支援を迅速に行っています。多くの優秀なドクターやナース、スタッフがいますので、彼らの日々の働きに感謝の気持ちを持ち続け、彼らの努力を裏切らないようにしたいですね」
 人間ドック部門にも力を入れている。超高齢社会にあっては、生活習慣病やがんの『予防医療』による健康寿命の延伸も重要な課題であるからだ。「胎生期の頃から目に見えない不具合が蓄積されていきます。年を取ってからケアを始めるのではなく、若い頃からケアを継続することが大切です」
 また、老化の研究が進んでおり「数十年後には老化の進行を抑えられるようになっていくかもしれない」という。超高齢化社会において、老化を抑えられるようになれば、更なる健康寿命の延伸に繋がるはずだ。
 患者は家族や医療者に対し辛く当たることもある。これに